

昔々、ムゼムワリムというスルタンがいた。彼は、町そのものをひどく扱いはしなかったが、ひとつの悪い癖があった。結婚式が行われる度に、彼はそこへ行き、地面に米を投げてばらまき、その上を歩くのだった。その上また、花嫁に着せるはずの織物を取って、それを地面に広げ、その上を歩くのだった。

或る日、身内の他のスルタンが、件のスルタンを家に招き、彼に言った。「君のやっていることはよいことじゃない。食べ物を取って、それを地面に投げてからその上を歩くなんてよくない。我々が治めるのだとしたら、[教えに]書かれているその通りに治めようではないか。真のスルタンのように治め、法を立て、財産に気を配り、人々に気を配ろうではないか。すべてが秩序に従っているように。

われらがスルタンは、もうひとりのスルタンが彼に話したことが理解できなかった。彼は軍隊を送り、彼の軍隊は、もうひとりのスルタンのところへ行き、彼を殺した。軍隊は彼の妻や門衛までも殺した。

それ以来、そのスルタンは他の悪癖に染まるようになった。彼は人々を高いところに、頭や足や腕で吊るすことを思いついた。それから、彼らにスプーンで食物を与えるのである。

このようなことが続いているうちに、ひとりの旅芸人が町にやって来た。スルタンの素行についての噂を聞いていたその男は、ちゃんとした身なりをしてから道に出て、スルタンの王宮の裏口から入った。スルタンは彼を捕らえて言った。

「今後はお前が、私の用務の責任者だ。私が老いるまで」。

スルタンはその時55歳だった。

その尊敬すべき男はスルタンの許に留まり、彼らは一緒に町を治めたが、彼は人々に対するスルタンの扱いを見ると苦しんだ。しかし、殺されることを恐れて何も言おうとはしなかった。

人々は処刑され続けた。土に[身体の]一部が埋められ、地上に出ている首が刎ねられ、身体下部が埋まったままという具合だった。

このようなことが続いているうちに、ひとりの女性が、スルタンの許で働いている男に会いに来た。彼女は彼に言った。

「この町では余りにも多くのことが起こりました。お願いですから、私がここであなたにお話しすることが繰り返されないようにして下さい。私は自分の子供たちに殺されるかも知れません。私がここに来たのは、私が年老いているからで、私はもう耐えることも、思い煩うことなく歩くこともできません。皆にとって望ましいのは、あなたがあのスルタンを何とか失脚させることです。私には息子がいて、かれは軍隊の隊長でしたが逃げてしまいました。今では、逃げた人数は50人に達してます。望ましいのは、あなたが私の息子と一緒に、思い切って、この町を平和な場所にする事なのです。人々が正義に燃えるように」。

男と老女はそこで別れた。

彼がスルタンといつものように2人だけで差し向かいで食事をしながら議論をしていた或る日のことだった。ひとりの町民が、多くの人を集め、虐待、拷問、台無しになった食べ物など、スルタンが彼らに蒙らせたことの復讐のために、宮殿に押しかけ始めた。

スルタンと共に働いていた男は剣を持っていたが、その剣を取り、立ち上がる振りをして、スルタンの方に向き直り、一撃で彼を真っ二つにした。彼は、スルタンの衣服を見につけて外に出てから軍隊に、スルタンが彼に衣服を託したと言った。

「このことは町の人々とも、事実上既に同意されている。剣を収めなさい。我々は、町の人々を祝宴に招待したのだ。スルタンが私に彼の衣服を託したのは、伝統的な装いを身にまとうことで、我々の歴史の威信を町の人々に示すことを決めたからだ」。

町の人々は棒で武装して宮殿に着き、彼らは、武器を置いた軍隊に立ち向かった。新しいスルタンになった男は、老女の息子を来させた。彼が到着すると、新スルタンは言った。

「軍は、お前に任せる。お前が今後は隊長だ。スルタンだった男は私が首を刎ねた。あいつは、残酷で掟知らずの男で、人間ではなかった。彼は為してよいことは行わず、悪ばかり行っていた。彼は人々を虐待し、奴隷同然に扱い、財産を奪い、美しい娘は皆、どの家であろうといつでも浸入出来た彼の軍隊に犯されるところだったのだ」。